



大阪タクシー協会 広報サービス委員長

道野 隆氏

の高齢化・マナー問題など。特に大阪では規制緩和が進むなか運賃・増車競争に特化してしまい厳しい状況だ。超少子高齢化社会を迎えこれからのタクシーが問われる時期がきている。生誕100年を大きな節目にしたい」

——協会の取り組みは

「タクシーの日のほかに春秋の交通安全週間や『年末の飲酒運転根絶、お帰りはタクシーで』キャンペーンなど事業者自らが揃いのジャンパーを着て活動している。タクシー自体が交通安全の模範にと違法客待ち、違法駐停車タクシーへの指導やタクシー乗り場での乗車の推進などお客様との新たな乗降の秩序作りに努力をしている」

——EV（電気自動車）タクシーも見かけるが

「タクシーの9割がエコなLPG車だ。大阪府内ではEVタクシーが50台稼働している。今後さらに低炭素社会に貢献していきたい」

——今後のビジョンは

「国の『タクシーサービスの将来ビジョン小委員会』の5つの提言にこれからの進むべき方向が集約されている。専門コンシェルジュ。地域密着型生活支援サービス。地域社会の安全・安心貢献。日本の顔・地域の顔。移動制約者などの移動手段。40年前から実施している『福祉タクシー』や『子育てタクシー』『お手伝い・便利屋タクシー』、郡部や過疎地域での『乗合タクシー』などタクシー独自の多面的なサービス提供が今後の発展の鍵だ。またホテルなどとタイアップするなど『観光タクシー』も広めたい」

——タクシーの将来像は

「タクシーは人を運ぶだけではなく乗務員の何気ない言葉で励まされたり、会話を楽しむ人がいたり、高齢者の生活を支えたりすることもある。タクシーは街の中、暮らしの営みの中で生き続けていく存在。この生誕100年をタクシーが変わる新たなチャンスにしたい」

大阪でタクシーがスタートしたのは1917年8月。大阪タクシー自動車T型フォード7台で梅田駅構内に開業。その後約1世紀にわたり公共交通機関の一翼を担ってきた。「安心・安全・便利・快適」なタクシーを目指し積極的に活動している大阪タクシー協会広報サービス委員会の道野隆委員長（ふれ愛交通社長）に取り組みと今後のビジョンを聞いた。

——タクシー生誕100年を振り返って

「前半60年は右肩上がり。関東大震災でその役割が認知され、戦後は交通インフラ整備が追いつかず需要が拡大した。大阪万博をピークに後半40年は苦難の時代だ。売上減少・乗務員